

# Antony and Cleopatra における悲劇受容

## 第一部

中村六男\*

Mutsuo NAKAMURA : *Antony and Cleopatra* : Its Tragic Acceptance; Part I

(1956年10月1日受理)

### (I)

Shakespeare の悲劇 *Antony and Cleopatra* (制作年 1606~1607) は従来あまり好評を博さなかつた劇であつた。S. L. Bethell の言葉によると、Shakespeare の大悲劇のうちで最も冷遇を受けてきた作品である。何故極めて優れた悲劇でありながら、このように重視されずに余り顧られなかつたのかということ、Dr. Johnson によれば、この戯曲の欠陥はその構成にあるという。この戯曲は5幕からなり、場の数は合計42場という多数より出来上つている。さらにまた場所としては Egypt の Alexandria, Rome, Messina, Mesenum, Syria, Athens, Actium 等ローマ帝国の広大な多数の地域にわたり、場の長さも第三幕九場や第四幕拾一場のように僅か4行からなつているものもあり、第五幕二場のように364行から出来ているものもある。いたつて場の長さが不揃である。以上のような欠点は劇の三単一の法則からいつても、演出する場合から言つても、非常な不手際と言わざるを得ない。

この悲劇の上演史をみても、始めて上演されてから二十世紀までの間に1759, 1813, 1833, 1850, 1855, 1867, 1873, 1890, 1897, 1900, と僅か十回程再演されたに過ぎず、十七世紀、十八世紀などは殆どなく、十九世紀になつてから漸く再演され始めたのである。しかも改作されたものが多く再演され、1850年のもの以外は殆ど皆不成功に終つたと言われている。勿論十九世紀になるまで殆ど再演されなかつたのは Dryden がこの悲劇にまねて作つた *All for Love* が長い間人気を呼んで繰返し再演されたので、Shakespeare のこの悲劇が再演されるのを妨げたという事状にもよるであろうが、この劇が余りに場数が多くて、Elizabeth 朝の簡素な apron theatre では上演が容易であつたろうが、舞台面が重要な役割を果す Elizabeth 朝後の劇場では上演が極めて困難であつたからであろう。

しかしながらこのことがこの悲劇の持つ本質的な欠陥と果して言い得るであろうか。この戯曲が始めて上梓さ

れたのは1623年の First Folio の中に加えられた時であつた。其時は場の区分がしてなかつたのである。それから後の編者が勝手に場所に準拠して現在この悲劇にあるような場の区分をしたのである。それゆえに場の区分を取り去つて通読してみると、この悲劇がいかに緊密な、しかも対照の妙を得た、よく均衡のとれた完璧な構造を持つている劇であるかが了解出来るのである。「場所 (locality) がすなわち場 (scene) である。」との観念を拭い去る時は、構成がこの悲劇の欠陥どころか、却つてすばらしいこの劇の特徴であることが会得できる。演出の困難さを口にするのは、かく言う演出家の工夫の足らないことか、無能さを暴露するに過ぎない。芝居は勿論、映画かテレビにでも上手におさめるならばすばらしい成功を取めることだろう。

さらにまたこの悲劇は性格描写、作詩および措辞、広大な規模、心象の駆使法、思想等いづれの点からいつても極めて優れており、テーマからいつても恋愛と死とを扱つた作品としては世界の最高限度の水準までその力を發揮した最大傑作であることは現代の評者の大多数が認めている所である。

それにも拘らず Coleridge や Hazlitt はこの戯曲の優秀さを認めて、'the most wonderful' とか 'the finest of his historical plays' と言つてはいるが、史劇と見做し、Shakespeare の最大傑作の列に加えず、それらに次ぐものと評価して悲劇としては扱つていない。また A. C. Bradley もその著書 *Shakespearean Tragedy* の中では扱わず、*Oxford Lectures on Poetry* で扱つている。また現代の学者の中にも少数ではあるがこの劇の悲劇としての価値を評価出来ない者もいる。この様にこの戯曲が悲劇としての真価が往々にして認められないのは如何なる理由によるのであろうか。私はその理由はこの劇が持つ一大特徴である悲劇受容にあるのではないかと思う。

### (II)

*Antony and Cleopatra* の特徴である悲劇受容を述べるに先立つて、悲劇とはいかなる意味であり、悲劇の本

\* 信州大学繊維学部 英語研究室

質は何であるかを少しく考察しなければならない。けれどもこのことに就いては昔から尽きせぬ議論が関わされ、種々様々な説があり、いまだに決着をみない問題である。

アリストテレスの詩学では「トラゴディヤは然るべき大きさを持つてそれ自身全き、一つの壮重なる行動を模倣したものであり――哀憐と恐怖とを作興する出来事を含み、それを通して、かような情緒のそのカタルシスを行う。」と定義されており、「筋、性格、措辞、思想、場面、旋律の六個の要素」から成立つと説いている。この六要素のうち最後の旋律は今日は要素とは認められなくなつた。勿論悲劇の成立要素を具備し、行動を模倣するもの即ち役者の行動を指示する作者の書き物即ち戯曲がなければならぬ。しかし定義にあるような条件を満たすためには戯曲や役者の外に行動の場たる舞台と観覧者がなくてはならない要件である。悲劇が表面に表われた要件としては役者、舞台、観覧者を必要とする。観覧者がなければ 'Tragedy through pity and fear effects the proper catharsis (or purgation) of these emotions.' があり得ない。悲劇とは観覧者の立場から言うと、「舞台上で役者の演ずる動作を觀ていると哀憐と恐怖の念が作興されて、それを通してこれらの情緒が本然的に浄化される劇」ということになる。

Elizabeth 朝では一般に悲劇とはその結末が惨事となり、主要登場人物の屍が累積するような壊滅に終る劇を意味した。それ故に惨澹たる流血が悲劇の第一要件であつた。更にまた魂を揺り動かす、心臓の動悸を胸中に重く打たせ、思いを張りつめさせ、魂を本来の姿に戻らせ、不幸に涙を絞らせ、遂に感覚を沈黙たらしめてその機能を奪うというような悲壯美に満ちた壮嚴さが悲劇の第二の要件として認められていた。これらの要件を具備するためには更に当然のこととして榮華を誇る境遇に居る偉大な人物が不運や其他の原因によつてその高所から悲惨な状態に落ち込んで、憐れな長期を逐げることが悲劇の第三の要件とされていた。以上三つの要件を満足に具備している劇が Elizabeth 朝の人々には悲劇であつたのである。

それならば現代人にとつては悲劇とは如何なる劇であるか。この問題は未だに解決されていない。しかし悲劇には浄化がなければならぬ。G.B. Harrison は世界の最大悲劇と言われているものの様に劇場において情緒の深い浄化を惹き起して精神の高揚 (exaltation of spirit) を覚えさせる悲劇を深遠なる悲劇 (deep tragedy) と称

し、単に不幸な悲惨な結果に終る劇を悲劇 (tragedy) と言い、悲劇を二種類に區別している。そして前者を説明するのに Virgil の、'Sunt lacrimae rerum et mentem mortalia tangunt' という言葉を用いている。彼はこの言葉は訳すことが不可能であると言つている。彼によれば深遠なる悲劇の性質は lacrimae rerum であつて、これは深奥なる道義心 (a profound moral sense) である。悲喜、正邪、善悪、憐愍恐怖の本性的意識 (instinctive sense) がなければ他人を深く感動させることもまた感動させられることも出来ない。この道義心こそ事件の本質的な意義を解する能力である。しかしこの深奥なる道義心とは学校で教えられる修身とか、行動の教訓や行為の体系を教える学説の様なものではない。偉大な悲劇は決してお説教じみた教訓を与えるものではない。この道義心こそ悲劇の浄化をなしとげるに無くてはならない第一要素である。なんとなれば、この道義心とは人間の行動を単に法律や因習に従つてではなく、最も深奥なる良心において根本的に本性的に識別する心を意味するからである。

深遠なる悲劇の第二の性質は mortalia の意識即ち人間の苦悩に悲哀の情念を感じる能力である。これは人生を冷淡に科学的に眺めるのではなく、人情をもつて眺める心である。この心があればこそ偉大な悲劇の中に登場する人物や事件が本質的には吾々の如何なる人間の場合でも有り得るし、また起り得るものとして扱われ得るのである。悲劇にこの性質が無ければ観覧者の心を決して揺り動かすことが出来ない。その結果悲劇の浄化は到底なし得るものではない。

深遠なる悲劇の第三の性質は劇として巧みなものであることである。戯曲が題材、筋、構造、性格描写、其他の点においてそれぞれ優れて居り、全体としても手際が極めて優秀なものでなければならぬことは勿論であるが、演出演技の技能も極めて勝れて居らねばならない。そうでなければ如何に戯曲としては優秀な傑作であつても、その劇は観覧者の心の奥底まで透徹して行くことが出来ない。それであるから悲劇の浄化は起り得ないことになる。以上大体 Harrison の説く所を要約して現代の悲劇論の代表としたのであるが、要するに悲劇とは教養のある適当な観衆の面前で適切に演ぜられた時、観覧者の情緒を完全に浄化する劇ということになる。

いままで略述してきたこれらの Aristotle や Elizabethans や Harrison の悲劇に関する諸説に照らしてみても Shakespeare の *Antony and Cleopatra* は悲劇たるの

要件を繪て完全に具備している。それ故に悲劇であることは寸毫も疑の余地はあり得ない。しかしながらこの悲劇は他の作家の悲劇とは勿論彼の他の悲劇とも異つている。同じ恋愛と死とを題材としている *Romeo and Juliet* とすら浄化の仕方の性質が非常に異つている。

この悲劇は *Romeo and Juliet* の様に Shakespeare の初期の年代に属する作品でなくて、悲劇時代から後期の Romance 時代へと移ろうとする過渡期の作品である。Shakespeare の精神生活が暴風雨の荒れすきんだ時期を経て、やがて地平線の彼方に一点の晴れ間を仄々と見始めようとしていた時期の創作である。それで悲劇の要素と romance の要素との両者をこの悲劇は包蔵している。其故にこの悲劇を romance tragedy と呼んでいる批評家も居る。確かにこの事はこの悲劇の特徴であつて、心象や nature 観などの点においてもそれが現われているが、そうした特徴と同時にこの悲劇の最大特徴を表わすものがこの劇の悲劇受容であると思う。

しからば悲劇受容とは如何なる意味であろうか。悲劇では劇の主人公が結局最後には悲惨な境遇におちて死ぬのであるが、或る種の悲劇ではその悲惨な死を主人公が悲哀の裡にも寧ろ勝ち誇つた気持ちで受け容れているものがある。またたとえ主人公はそうでなくとも、その劇の観覧者がそうした死を同情しながらも肯定的に受け容れるものがある。この様な受け容れを悲劇受容 (tragic acceptance) と言う。Walter Oakeshott も述べている様に Shakespeare の大悲劇にはすべてこうした悲劇受容の要素を或程度認めることが出来る。例えば *Othello* では *Othello* は自ら死を選びまた選ばねばならなかつた。また *King Lear* では、Do you see this? Look on her, look, her lips, / Look there, look there! (V. iii. 310~311), と言つて Lear 王は Cordelia が生きて居るものと誤解して歓喜に満ちて死んでゆく。死こそは火の車に縛られた Lear 王を解放するものであつた。Vex not his ghost: O! let him pass! he hates him / That would upon the rack of this tough world / Stretch him out longer. (V. iii. 313~315) と言う Kent の言葉の様に死は Lear 王を苦難な運命からのがれさせるものとして観衆はこれを受け容れるのである。また *Hamlet* では If thou didst ever hold me in thy heart, / Absent thee from felicity awhile, / And in this harsh world draw thy breath in pain, / To tell my story. (V. ii. 356~360) と Hamlet は死を苛酷なこの世からのがれ天上の歓と Horatio に言つている。しかしながら Sha-

peare の悲劇では *Antony and Cleopatra* 程こうした悲劇受容が高度に表わされているものはない。悲劇には哀憐と恐怖の情が作興されてそれらの情緒が浄化されるのであるが、それと同時に生命の恐ろしい浪費感 (a sense of terrible waste of life) が通常強く伴うのである。ところがこの悲劇では、この浪費感よりは悲劇受容の感が強く感じられるのであつて、これは Walter Oakeshott の述べている様に Shakespeare が Plutarch の影響を強く受けた為でも亦あるかも知れないが、これがこの悲劇を他の悲劇と区別させているのである。

### ( III )

悲劇受容は劇に登場する主要人物がその悲壮な死を自ら受容するものと、その劇の観覧者なりその戯曲の執筆者なりがそれらの死を受容するものとの二種類に区別することが出来る。其故に悲劇受容に関して言えば、悲劇には主要人物および観客の両者ともその死を受容しないもの、主要人物のみ受容するもの、観客のみが受容するもの、主要人物および観客の両者が共に受容するもの、の四種類があると言うことが出来る。それならば *Antony and Cleopatra* の悲劇受容はいかなる内容のものであり、悲劇受容からいえばこの悲劇はいかなる種類に属するのであるか。この悲劇の主人公である Antony と Cleopatra との悲劇受容から考察してみたいと思う。

論者の或る者によれば、*Antony and Cleopatra* は Antony が Brutus および Cassius を斃した後 Octavius Caesar および Lepidus との三人で三頭政治を組織し、Brutus との戦の時に Brutus 一派を支持した Egypt の女王 Cleopatra を膺繼するために Egypt に攻め入るが、かえつて Cleopatra の魅力によつて恋の虜となり、正妻の Fulvia や後妻として娶つた Octavia を忘れ、中年の恋に溺れて Rome に対する忠誠心を失い、かえつて Rome に反旗を翻し、そのために Octavius に攻め立てられ、遂に敗戦の結果 Antony も Cleopatra も自殺する、即ち恋の為に自らの本分を忘れ去つた墮落せる政治家であり軍人であつた Antony がその当然の報いとして自滅する歴史上の事実を扱つたのがこの劇であると説かれている。この様な論者の見方によれば、悪に対する因果応報としてこの劇の観客の悲劇受容は容易に説明出来るのであるが、主人公の悲劇受容を説明することが困難になる。この見方はこの劇を悲劇としてよりは寧ろ史劇と見做し、教訓劇と考えているのであつて、この劇の内容を深く考察して居らない浅はかな見方であるとの非難から免

がれることは出来ない。*Romeo and Juliet* が人生の辛苦をいまだ嘗めない純真無垢な若者達の恋愛と死とをテーマとした悲劇であるならば、*Antony and Cleopatra* は人生の苦難を経て来た中年者達の濃厚な恋愛と死とをテーマとした悲劇であると見るのが今日の通説である。成程折衷的に Granville-Barker は、'Shakespeare is not writing a mere love-story, he is transplanting history to the stage. …… A tragedy of disillusion, we might call it.' と言つて単なる恋愛物語ではなく、やはり歴史を舞台に移したものであり、政治的権力を失つて行く者の幻滅の悲劇であると説明している。しかしながらこの悲劇は歴史的事実や権力争いは単にその背景であつて、主要人物はどこまでも恋愛を中心として行動しており、その為に死んで行くものと解する方がよいと思う。即ち Theodore Spencer の言葉 'Antony and Cleopatra, unlike the chief characters of the other great tragedies, are never disillusioned, for they have no illusions to start with. Antony knows what he is doing when he chooses Egypt instead of Rome, and their deaths are, as I have said, part of the order of things.' の方がこの悲劇の核心によりよく触れているものと思われる。このようにテーマから見ればこの悲劇は *Romeo and Juliet* と同様恋愛と死であるが、一方には悲劇受容が主人公達に殆んどなく、唯々恋の相手が死んだので絶望の余り恋人の後を追つて死ぬのであるが、他方は寧ろ二人とも勝ち誇つた気持で死んで行く。この様にこの悲劇の悲劇受容の強いのは何故であろうか。この点を少しく明白に見たいと思う。

主要人物の住む世界を考えて見ると、この悲劇では Rome と Egypt である。Rome と Egypt とは人生観や価値判断が対照的に相異なる。一方は西欧的人生観、価値観により、他方は東方的人生観、価値観によつている。G. I. Duthie, Arthur Swell, S. L. Bethell, Wolfgang J. Weilgart, Robert Speaight, Theodore Spencer の学者達の説くように、Rome は現世的人生観により、Egypt は超絶的人生観に依つている。Rome は権力主義であつて、禁欲、国家中心的思想、名誉、義務、忠誠、理性、武勇、克己、信仰、自制、節度、忍耐、潛美性、實際的常識、厳格、思慮分別、奉仕的精神といったような精神的否定的価値に重きを置き、求心的な知的な限定的な道徳や政治的法則的秩序を尊んだ。それ故に悪い面としては利己的であり、策略的でもあつた。これに対して、Egypt は愛情主義であつて、恋愛、快楽、耽美、直観、

官能性、想像、空想、自然発生的感情、神秘、情熱、寛大さ、人間性、平等観、個人性などの様な肉体的肯定的価値を重んじ、遠心的な情緒的な拡大的道德により、遠大性や自由を尊んだ。前者は Apollo 的であり、後者は Dionysus 的であつた。Octavius や Octavia はこの様な Rome の化身であり、Cleopatra はこの様な Egypt の化身であると思ふ。この悲劇はこの両者の対立抗争より生ずるのである。Cleopatra をとりまく Egypt 人はすべてこの女王に対する愛情によつて結合して居り、Octavius を取りまく兵士達は権力や名誉や忠誠を理想としているが、反面処生術にたけた策士でもあつた。

Antony はローマ人であつたのであるが、しばらくこうした相対立する両世界に立つていた後に、やがて Rome の世界を捨てて愛の世界である Egypt の世界即ち Cleopatra を選んだのである。この様な Rome を捨てた Antony はローマ的価値から判断すると、彼の部下の Philo の言葉の通り、

Nay this dotage of our general's  
O'erflows the measure : those his goodly eyes,  
That o'er the files and musters of the war  
Have glow'd like plated Mars, now bend, now turn  
The office and devotion of their view  
Upon a tawny front : his captain heart,  
Which in the scuffles of great fights hath burst  
The buckles on his breast, reneges all temper,  
And is become the bellows and fan  
To cool a gipsy's lust. (I. i. 1~10)

and you shall see in him  
The triple pillar of the world transform'd  
Into a strumpet's fool. (I. i. 11~13)

の様にあたら名将軍が化して娼婦の幫間となつたのである。しかし Egypt の価値から判断すると、Rome をすてて、Cleopatra と相愛し合つている Antony にとつては、

Let Rome in Tiber melt, and the wide arch  
Of the rang'd empire fall ! Here is my space,  
Kingdoms are clay : our dungy earth alike  
Feeds beasts as man, the nobleness of life  
Is to do thus : when such a mutual pair, (*Embracing*,  
And such a twain can do't, in which I bind,  
On pain of punishment, the world to weet  
We stand up peerless. (I. i. 33~40)

ローマの世界は無価値なものとなり、Cleopatra の世界

こそ本当の世界であり、愛の抱擁こそは人生の最も高貴なものであり、その為には如何なる罰の苦しみも既に覚悟の上である。この二人でこそ真の愛のすばらしさが実現出来ることを世界に見せしめるべきであると言うことになる。そして Antony は Cleopatra と共に極めて平等的民主的な自由な、

To-night we'll wander through the streets, and note  
The qualities of people. (I. i. 53~54)

のような sport とか他の逸楽や快楽に耽るのである。そのためローマ人の眼には、'he is not Antony' (I. i. 57) と映るのである。しかしながら時折突然に Antony にローマ的な世界が甦ることがあつた。

Cleó. He was dispos'd to mirth; but on the sudden  
A Roman thought hath struck him. (I. ii. 79~80)

そして Antony は妻の Fulvia が死んだという報知と Sextus Pompeius が Rome の三頭政治を脅かしているとの報告とを受けるとローマの世界が甦つて、急遽 Rome に帰るのである。しかしながら Antony は I. iv. 56~71 の Octavius の言葉にある様な困苦欠乏に耐えて来たローマ的価値から言うならば最も立派な名誉高き名将でかつてはあつたにも拘らず、一旦東方の世界に接してからは Cleopatra の魔力からはどうしても脱することが出来ない。Antony, Octavius, Lepidus の三巨頭会談の後、Antony と Octavius との両者を結ぶ絆として、Octavius の愛する姉 Octavia が Agrippa の提案に依つて Antony の後妻となる。この政策結婚の犠牲となつた Octavia という女は Agrippa の言葉に依ると、

..... take Antony

Octavia to his wife; whose beauty claims

No worse a husband than the best of men;

Whose virtue, and whose general graces, speak

That which none else can utter. (II. ii. 127~131)

という、ローマの世界では絶世の美人であり、最も有徳のもつとも立派な婦人であつた。また Octavius の友人の Maecenas の言葉によれば、

If beauty, wisdom, modesty, can settle

The heart of Antony, Octavia is

A blessed lottery to him. (II. ii. 241~243)

とある様に美人で賢明でしかもしとやかな婦人であつた。しかしローマ的世界の最も賢明な美貌な淑徳な婦人でも、生命力の充溢した燃える熱情をたぎらせた、しかもその官能的熱情は Enobarbus の言葉にあるように 'her passions are made of but the finest part of pure

love.' (I. ii. 144~5) 純粋な愛情の最もすばらしい部分のみから出来ている東方の Cleopatra と到底対抗できるものではない。一旦自由な愛情を味つた Antony は政策のために人身御供に平気でなる様なローマの世界の女に、如何に淑徳な美人であらうとも、心を惹かれるような道理はない。Antony はその魅力が余りに強いので、Cleopatra と、

Ant. Would I had never seen her!

Eno. O, sir, you had then left unseen a wonderful piece  
of work, which not to have been blest withal,  
would have discredited your travel. (I. ii. 149~153)

逢わなければよかつたと後悔する程である。其故に、

Ant. Say to me,

Whose fortunes shall rise higher, Caesar's or mine?

Sooth. Caesar's

Therefore, O Antony, stay not by his side :

Thy demon, that thy spirit which keep thee, is  
Noble, courageous, high, unmatchable,

Where Caesar's is not. But near him, thy angel  
Becomes afeard; as being o'erpowerd, therefore

Make space enough between you. (II. iii. 14~22)

と Antony の問いに対して卜者 (soothsayer) が答えるままでもなく、妻を裏切つてやがて Antony は Cleopatra の許に走らざるを得なかつたのである。

Actium の戦いで陸上で戦えば Antony は Octavius の軍を破ることが確実に出来たのであるが、部下達の進言を無下に斥けて、Cleopatra の願をきき入れて不利なること明瞭な海戦をわざわざ挑み、彼女と共にこの戦に参加し、勝敗のいまだに決しない間に臆病になつて逃げ去る彼女の船の後を追つて味方の艦隊を見捨てたまま遁れ去つたのである。この大敗戦以後彼の運命は急速に傾いて行つた。彼はしばらくの間絶望におちいるが、やがて彼女に対して、

Fall not a tear, I say, one of them rates

All that is won and lost : give me a kiss,

Even this repays me. (III. xi. 69~71)

と言う。この様に Antony が Rome を捨てて Egypt を選んだからには悲劇となる結果は彼には承知の上でありそれを受容せざるを得ないのである。なんとなれば権力を理想としてそれを得るためには愛情をも犠牲とすることを拒まない者と、恋愛のためには権力をも生命をも取つて犠牲としてしまう者とが対立して戦う時には現世的には必然的に後者の方が敗北することは如何に愚者であつ

てもわかりきったことである。其故に we have kiss'd away / Kingdoms, and provinces, (III. x. 7~8) の結果に陥ることは何人にも明瞭であるからである。

Antony は部下達に寛大な気持を示し、自らの財宝を与えて自分の許を去るようと勧めめる。

Friends, be gone,

I have myself resolv'd upou a course,

Which has no need of you. (III. xi. 8~10)

と既に意を決している。やがて Alexandria の野に Octavius と戦つて、まさに消えようとする燈の最後の燃え上る輝の如く一時は大勝利を得るが次の海戦で Cleopatra の艦隊は Octavius の艦隊に戦わずして降服してしまふ。それを見て Antony は Cleopatra が Octavius と内通して彼を計略にかけたのだと早合点し、人生最高唯一の目的であつた Cleopatra の愛までも失つてしまつたと考え、すっかり絶望する。Antony は Cleopatra に対して非常な激怒の言葉を浴びせ、まさに殺そうとする気配を示す。彼女は恐れをなして陵墓の中に隠れ、自殺したと Antony に伝言するように命ずる。Antony は忠実な従者 Eros に向つて、

Ant. Eros, thou yet behold'st me ?

Eros. Ay, noble lord.

Ant. Sometime we see a cloud that's dragonish,

A vapour sometime, like a bear, or lion,

A tower'd citadel, a pendent rock,

A forked mountain, or blue promontory

With trees upon't, that nod unto the world,

And, mock our eyes with air. Thou hast seen these signs,

They are black vesper's pageants.

Eros. Ay, my lord.

Ant. That which is now a horse, even with a thought

The rack dislimns, and makes it indistinct

As water is in water.

Eros. It does, my lord.

Ant. My good knave Eros, now thy captain is

Even such a body : here I am Antony,

Yet cannot hold this visible shape, my knave.

I made these wars for Egypt, and the queen,

Whose heart I thought I had, for she had mine:

Which whilst it was mine, had annex'd unto't

A million moe, now lost : she, Eros, has

Pack'd cards with Caesar, and false-play'd my glory

Unto an enemy's triumph.

Nay, weep not, gentle Eros, there is left us

Ourselves to end ourselves. (IV. xiv. 1~22)

と言ひ、ローマの世界を捨てて Egypt の世界を選んだ Antony は Cleopatra に欺かれて此処にすべてを失つてしまつたと考える。残るは唯々この主従の二人のみである。この世と人生とは一切雲の如くにして実体のない無である。名将と雖も変り行く雲の如くこれ空である。生きるべき世界を失つて後に残つた人間は唯々形骸にして死によつて無に帰する外に途がない。諦めと謙虚なる気持になる。其処へ Mardian が登場して Cleopatra が Antony の名を呼びながら死んで行つたと女王に命ぜられたままに伝える。

Ant. Unarm, Eros, the long day's task is done,

And we must sleep. (IV. xiv. 35~36)

Antony は現世への執着を完全に断ち切ることが出来た。Cleopatra の愛を失つていないことを知ると死は忽ち變じて、第四幕、十四場の 44~54 に、

I will o'ertake thee, Cleopatra, and

Weep for my pardon. So it must be, for now

All length is torture : since the torch is out,

Lie down and stray no farther. Now all labour

Mars what it does : Yea, very force entangles

Itself with strength : seal then, and all is done,

Eros ! —I come, my queen :—Eros ! —Stay for me,

Where souls do couch on flowers, we'll hand in hand,

And with our sprightly port make the ghosts gaze:

Dido, and her Aeneas, shall want troops,

And all the haunt be ours. Come, Eros, Eros !

とあるように、極楽浄土 (Elysium) への門となる。(従者の Eros を呼ぶのであるがこの Eros は愛の神 Eros の意味を帯びる。) しかしこの Elysium に入る門を開くにはローマの世界の最も美点である克己的勇氣が必要である。Cleopatra なきこの世は闇であつて来世こそは光明界である。

Ant. Since Cleopatra died,

I have liv'd in such dishonour that the gods

Detest my baseness. I, that with my sword

Quarter'd the world, and o'er green Neptune's back

With ships made cities, condemn myself, to lack

The courage of a woman, less noble mind

Than she which by her death our Caesar tells

"I am conqueror of myself." (IV. xiv. 55~62)

この門を開く勇気が Rome の武将だつた己にないとは何たる恥ぞ。女にも劣る。死を敢行することによつて名誉あるローマ的世界も Egypt の世界も共に自己の内に生き、同時にまた光明に満ちた永遠の楽土 Elysium に入ることも可能となる。更にその上に、

Thou strik'st not, 'tis Caesar thou defeat'st.

(IV. xiv. 68)

政敵 Octavius Caesar をも打ち破ることになる。其故に Eros に向つて殺してくれと Antony は言う。此処に吾々は Antony がその死を完全に受容しているのを見る。結局は Eros は敬愛する Antony を殺し得ず、彼を刺すべき刀で自らを刺して見事に自殺してしまう。Antony は、

But I will be

A bridegroom in my death, and run into't  
As to a lover's bed. (IV. xiv. 99~101)

と如何にも官能的な自殺を計る。しかし仕損ずる。其処へ Diomedes が来て Cleopatra がまだ生きて居り、陵墓に閉ち籠つておると告げる。Antony はその陵墓に運ばれる。血に染つて運ばれて来た Antony を見て Cleopatra は陵墓の上から叫ぶ。Antony は苦しい息でこれに答える。

*Ant.* Peace!

Not Caesar's valour hath o'erthrown Antony,  
But Antony's hath triumph'd on itself

*Cleo.* So it should be, that none but Antony

Should conquer Antony, but woe 'tis so!

(IV. xv, 13~17)

と Antony は Caesar に征服されたのではなくて、自らの勇気が自らに勝を制したのだと言う。極めて悲哀な情景のうちにおいて遂に陵墓の中へ引き上げられる。Cleopatra と最後の接吻をし、彼女に抱かれながら、

*Ant.* The miserable change now at my end  
Lament nor sorrow at : but please thoughts  
In feeding them with those my former fortunes  
Wherein I liv'd : the greatest prince o' the world,  
The noblest ; and do now not basely die,  
Not cowardly put off my helmet to  
My countryman : a Roman, by a Roman  
Valiantly vanquishd. Now my spirit is going,  
I can no more. (IV. xv. 51~59)

と臨終時の独特な心理作用である一生の瞬間的回顧のうち如何にも崇高な尊厳を取得し、ローマ人としての名

誉を失わなかつたことに満足しつつ従容として Antony は死んで行つたのである。

以上述べて来た所によつて明瞭であるように Antony は Rome を捨て Egypt の Cleopatra を選んだ当初から既に悲劇的結末を覚悟して居り、自ら意識しつつ死への途を辿り、最後にはローマの世界の美德である克己の勇気を媒介として Rome および Egypt の両世界を己の心中に生かしながら Elysium の永遠の世界へと悲しみのうちにも満足して入つて行つたのである。吾々は其故にこの悲劇の主人公である Antony の完全なる悲劇受容を見ることが出来る。

此の悲劇は既に述べた如くローマの世界とエジプトの世界の対立、約言すれば権力と愛との対立、具体的には Octavius Caesar と Cleopatra との対立抗争の悲劇である。Cleopatra は動物的な唯々感覚官能のみに生きる妖艶な女から崇高な神の列に加わる程の尊厳を持つた女王までの極めて広い幅を持つた女性であつて、絶えず変化する存在である。しかしその変化変身の中に不動不変なるものを持つている。それは相手に愛されることよりも常に全心全身を以つて積極的に相手を熱愛することに己の生命の充実と喜悅を見出す性格である。彼女は愛の対象として、相手の死後次々と Julius Caesar, Gnaeus Pompey, Antony と三人の偉人達を持ち、Julius Caesar との間に Caesarion, Antony との間に Alexander および Ptolemy といつた三人の息子達を持つたのであるが、一時に多数の恋人を持つようなことは決してしない。この点において Cleopatra は妖婦かも知れないが、ローマ的道德観に捉われざる限り、吾々は彼女を決して娼婦と考えることは出来ない。彼女は恋愛を打算的に他の目的達成のための手段に用いる様な女では決してない。Actium の戦の後 Cleopatra は密に Octavius と結び、運命の傾いた情夫の Antony を滅亡せしめて、己の保身と息子達の安泰とを計ろうとしたが、遂に偉人 Octavius を籠絡することが出来ずに自殺した Egypt の Ptolemy 王朝の最後の女王であると一般に歴史では伝えられている。しかし Shakespeare のこの悲劇では内通の点は明瞭さを欠いている。がしかし Antony の彼女に対する激怒の言葉に対しての Cleopatra の言動から察すると彼女が Octavius と内通して Antony の没落を計つたとはどうしても考えられない。またそう考えるべきではないと説く学者も居る。Shakespeare が歴史上の通説に逆うことを避けてこの点を曖昧にしたものと思われる。Octavius の使者 Thidias や Octavius に媚びるように装つたのは、

Antony 自身の言葉 'dodge and palter in the shift of lowness' (III. xi. 62~63) を実行したまでのことであつて、決して Cleopatra の本心ではなく、それを Antony が誤解して激怒したと解すべきであらう。それゆえに Cleopatra は極めて肉欲的ではあるが決して所謂娼婦型の女としてはこの悲劇では取扱われていないと解すべきである。またこの女王の侍女の Charmian も Iras もやはり卜者の言葉、

You shall be more believing than belov'd. (I. ii. 22)  
の様に、女王と同様に愛されるよりも積極的に他を愛する女達であつて、女王を愛するために女王の最後の時に殉死するのである。Egypt の世界は変らざる積極的な愛情をもつて女王を中心として結ばれた世界と見做すことが出来る。

女王の魅力は声の美しくさや美貌もさることながら、寧ろこうした世界の中心にあつて、Antony を常に熱愛しながら絶えず変化をとげて行く不可思議な力にある。

*Ant.* Fie, wrangling queen!  
Whom every thing becomes, to chide, to laugh,  
To weep : how every passion fully strives  
To make itself, in thee, fair and admired!

(I. i. 48~51)

と Cleopatra はあらゆる行動を Antony に美しくすばらしいものに見せる。もし Antony が彼女から立ち去るようなことがあれば直ちに死んでしまう程に弱々しい女とも現われることもある。それで Enobarbus はこの様に言う。

Cleopatra catching but the / least noise of this, dies instantly. I have seen her / die twenty times upon far poorer moment : I do / think there is mettle in death, which commits some / loving act upon her, she hath such a celerity in / dying. (I. ii. 137~142)

Cleopatra の愛は官能的であり、性的であり、死までも殆んど性愛的であつた。Antony はこうした Cleopatra の変化はすべて計略で、'She is cunning past man's thought,' (I. i. 143) だと考えることもあつた。しかしそれは Cleopatra が相手の心も身も我がものとしてしつかり捉えるための純粋な熱情的愛情から発する手段である。その恋の手練手管は、

*Char.* In each thing give him way, cross him in nothing.  
*Cleo.* Thou teachest like a fool : the way to lose him.

(I. iii. 9~10)

とあるように Antony を思うままに振舞わせて、それに

従つて愛して貰うのではなく、

*Cleo.* If you find him sad,

Say I am dancing; if in mirth, report

That I am sudden sick. (I. iii. 3~5)

と Antony の気分を逆をいつて、その心をすつかり捉えようとするものであつた。Actium の敗戦も女王が Antony の心身を捉えるための一つの手段であつたとも見方によつては考えられないこともない。女王の愛は、

Eternity was in our lips, and eyes,

Bliss in our brows' bent : none our parts so poor,

But was a race of heaven. (I. iii. 35~37)

の様に、肉欲的性愛であるが、それが同時に永遠なる天国の清い愛でもあつた。Antony が Rome へ去つた後に Cleopatra が彼を偲ふしをらしい第一幕五場、Antony が Octavia と再婚したとの報知をうけてヒステリーをおこして使者に乱暴をする第二幕五場、使者より Octavia の様子を聞いて彼がやがて Octavia をすてて彼女の許に帰つてくると自信を取戻す第三幕三場など、いかにも性愛に生きる女の姿を如実に現わしている。Antony は Cleopatra を 'my serpent of old Nile' (I. v. 25) と呼んだのであるが実に適切な言葉である。女王は大蛇の如く巨人 Antony にぐるぐる巻きに巻きつき、Antony の肉体をすつかり捕えてしまい、やがて心をも完全に我がものとなし、燃えたぎつた情炎の妖き焰で Antony も自らも焼き切つてしまうのである。この女王の魔力は、Enobarbus の言葉では、'she did make defect perfection.' (II. ii. 31) であり、またその人物は、

Age cannot wither her, nor custom stale

Her infinite variety : other women cloy

The appetites they feed, but she makes hungry,

Where most she satisfies. For vilest things

Becomes themselves in her, that the holy priests

Bless her, when she is riggish. (II. ii. 235~240)

永遠の若さ(当時 38 才であつた)を持ち、習慣もその無限に多様な変化の新鮮さを損ねず、他の女と異つて最も情欲を満足させる場合に益々情欲の渴望を唆り、もつとも品悪しき事どもも女王が淫がましき時は変じて優雅なものとなり、ために聖僧も女王に祝福を与えるという不思議な力を持つていた。そのために Antony は

You have been a boggler ever,

But when we in our viciousness grow hard—

O misery on't — the wise gods seal our eyes,

In our own filth drop our clear judgements, make us



Adore our errors, laugh at's while we strut  
To our confusion. (III. xiii. 110~115)

と自ら破滅に至ることを意識しながらも判断力を失つて  
どうすることも出来なかつた。Antony が死ぬ直前に女  
王は彼に言う、

Not the imperious show  
Of the full-fortun'd Caesar ever shall  
Be brooch'd with me; if knife, drugs, serpents, have  
Edge, sting, or operation, I am safe :  
Your wife Octavia, with her modest eyes,  
And still conclusion, shall acquire no honour  
Demuring upon me. (IV. xv. 23~29)

女王は死んでも Rome には屈服しない覚悟である。  
Antony が死んでしまうと女王にはこの世は豚舎としか  
思われぬ。この世に命をながらえる価値がない。

Shall I abide

In this world, which in thy absence is  
No better than a sty? (IV. xv. 60~63)

そして大小の区別が失われ、渾沌として目に立つ物は何  
にもない。女王の様な強烈な熱愛に身を献じていた女が  
その対象を失つたことは自身を失つたことになる。  
Antony の生前自らを Venus や Isis の袂々になぞらえ  
ていた女王にとっては現世の一切は無に帰してしまつた  
ことになる。女王は Egypt の世界を否定し、自己を否  
定して謙虚 (humility) な気持になる。浄化の世界に入  
り始める。

Cleo. No more but e'en a woman, and commanded  
By such poor passion as the maid that milks,  
And does the meanest chares. It were for me  
To throw my sceptre at the injurious gods,  
To tell them that this world did equal theirs,  
Till they had stol'n our jewel. All's but naught :  
Patience is sottish, and impatience does  
Become a dog that's mad : then is it sin,  
To rush into the secret house of death  
Ere death dare come to us? (IV. xv. 73~82)

女王は死ぬことは罪かと少しく迷うが、眼前にローマ人  
として立派な最後をとげた Antony の死体を見て元気づ  
き、

And then, what's brave, what's noble,  
Let's do it after the high Roman fashion,  
And make death proud to take us. (IV. xv. 86~88)

とローマ的な立派なやり方によつて自殺をとげよう

と決意する。かく決意すると、

My desolation does begin to make  
A better life: 'tis paltry to be Caesar :  
Not being Fortune, he's but Fortune's knave,  
A minister of her will : and it is great  
To do that thing that ends all other deeds,  
Which shackles accidents, and bolts up change;  
Which sleeps and never palates more the dung,  
The beggar's nurse and Caesar's. (V. ii. 1~7)

とすべてを失つて自殺することは却つて運命の支配下から  
脱し得ることであつて、運命の下僕にして塵土に権力を  
振り帝王に打ち勝つことになる。そこで自信を得て真  
の王者たるの尊厳を得るに至る途へと一歩を進めること  
になる。

Octavius と Cleopatra との争いが第五幕二場において  
展開する。Octavius は女王に寛大さを装つて利己的目  
的のために女王を生捕にしようとする。

Caes. Come hither, Proculeius. Go and say

We purpose her no shame : give her what comforts  
The quality of her passion shall require.  
Lest, in her greatness, by some mortal stroke  
She do defeat us. For her life in Rome  
Would be eternal in our triumph. (V. i. 61~66)

すなわち Octavius は女王を生捕にして Rome に連れ帰  
るならば、彼の凱旋を無上に飾るものであり、それによ  
つて人心を取攬して永久の勝利を収むることになる。も  
しそうなれば女王の息子達の生命は安泰でろろうが、  
Egypt の世界がローマの世界に征服されることになる。  
其処で両者の騙し合いが始まる。Cleopatra は陵墓を安全  
地帯と考えて籠つて居たのであるが、遂に策略によつて  
其処で捕えられる。短刀で自殺を企てたがその短刀を奪  
われてしまい厳重な監視を受ける。女王は Rome に連  
れて行かれるぐらいならば Egypt で如何なる死をも辞  
せないと喚く。Antony の偉大さや尊厳や気前よさが女  
王の心中に夢としてまざまざと思い出されて来る。

His face was as the heavens, and therein stuck  
A sun and moon, which kept their course and lighted  
The little O, the earth.

His legs bestrid the ocean, his rear'd arm  
Crested the world : his voice was propertied  
As all the tuned spheres, and that to friends :  
But when he meant to quail, and shake the orb,

He was rattling thunder. For his bounty,  
 There was no winter in't : an autumn 'twas  
 That grew the more by reaping : his delights  
 Were dolphin-like, they show'd his back above  
 The element they lived in : in his livery  
 Walk'd crowns and crownets : realms and islands  
 Were dropp'd from his pocket. (V. ii. 79~92)

これが Cleopatra が心も身も犠けて愛情を燃やした憧憬の男性として夢みた Antony の姿であった。

Cleopatra を監視するために来た Octavius の部下 Dolabella が女王の魅力に惹かれて好意をよせて同情していることを知り、彼より Octavius の意図を知る。Octavius が部下を引き連れて登場する。Octavius はいかにも寛大さを装って女王を騙して女王が自殺をしないようにさせようとする。女王はいかにも Octavius に取り縋つて生きてゆこうとする様子を示す。Octavius を安心させて見張を弛めさせて、その隙に自殺をとげようとする。ここに tragic irony が最もよく味われる場面が展開する。女王の財宝物係 Seleucus が女王の Octavius に提出した財宝物目録は偽りで、隠して目録のついでない財宝が非常に沢山あると言つて女王の偽を暴露する。そこで Cleopatra は大いに怒る。この場面は女王が財宝物への執着によつて生命の執着を示して Rome へ行くつもりであるかの如く装い、それで Octavius を騙そうと仕組んだ芝居であると解される。Octavius は女王を騙したものと思ひ、実はこの芝居によつてすつかり瞞されて満足して一行と共にひきあげる。Octavius が油断している間に女王は自殺することにする。其処へ Dolabella が戻つて来て、女王と息子達を三日以内に Rome へ出発させることに Octavius は決めたと言つて立ち去る。もし Cleopatra が Octavius に屈服すれば如何なる結界となるか。それは尊厳を望む女王にとつては地獄である。

*Cleo.* Now, Iras, what think'st thou?  
 Thou, an Egyptian puppet shall be shown  
 In Rome as well as I : mechanic slaves  
 With greasy aprons, rules, and hammers shall  
 Uplift us to the view. In their thick breaths,  
 Rank of gross diet, shall we be enclouded,  
 And forc'd to drink their vapour.

*Iras.* The gods forbid !

*Cleo.* Nay, 'tis most certain, Iras : saucy lictors  
 Will catch at us like strumpets, and scald rhymers

Ballad us out o'tune. The quick comedians  
 Extemporally will stage us, and present  
 Our Alexandrian revels : Antony  
 Shall be brought drunken forth, and I shall see  
 Some squeaking Cleopatra boy my greatness  
 I' the posture of a whore. (V. ii. 206~220)

このような恥辱には到底耐えられるものではない。其処で Cleopatra は 'To fool their preparation, and to conquer / their most absurd intents.' (V. ii. 224~5) 即ちその準備や意図を愚弄し打ち破るために、また Antony の許に行くために女王としての服装と王冠とを取り寄せる。

Show me, my women, like a queen : go fetch  
 My best attires. I am again for Cydnus,  
 To meet Antony. — — —

— — — bring our crown, and all.  
 (V. ii. 226~231)

Cleopatra にとつては始めに Antony に逢つた Cydnus が Antony が永遠に住む Elysium である。非常に哀憐の情をそそる場面である。其処へ前以つて取計つて置いた通りに田舎者が無花果の籠を持つて来たと言えられる。女王は彼を通すようにと命ずる。Cleopatra は決意を固め、毅然として王者としての威厳を取得する。

What poor an instrument  
 May do a noble deed ! he brings me liberty :  
 My resolution's plac'd, and I have nothing  
 Of woman in me : now from head to foot  
 I am mable-constant : now the fleeting moon  
 No planet is of mine. (V. ii. 235~240)

所謂 '極の転換' が此処において完全に行われ Cleopatra は女性としての域を越えて Antony の偉大性に到達したのである。無花果の籠の中には毒蛇が隠してあつた。それを持つて来た田舎者が Cleopatra と毒蛇に関するヒーマラスな話をしてから帰つて行く。それに続いて嚴肅壮重であり、悲壯であるが、それでいて歓喜を表わす死の場面が展開する。

*Cleo.* Give me my robe, put on my crown, I have  
 Immortal longings in me. Now no more  
 The juice of Egypt's grape shall moist this lip.  
 Yare, Yare, good Iras; quick : methinks I hear  
 Antony call, I see him rouse himself  
 To praise my noble act. I hear him mock  
 The luck of Caesar, which the gods give men

To excuse their after wrath. Husband, I come :  
 Now to that name, my courage prove my title !  
 I am fire, and air; my other elements  
 I give to baser life. (V. ii. 279~289)

これは悲恋の極地であり、女王としての死装束をして、人間を形成する四元素のうち土と水との下位の元素をすて、尊き元素火と空気とのみに我が身を浄化し、燃え立つ愛情をもつて真の妻として夫の許へ旅立つのである。崇高な死を敢行する勇氣をもつて、女王は Antony の情婦から脱して彼の妻としての資格を得たのである。女王はこのローマ的死によつて運命に支配されない尊厳を得て永遠不死の女王として Elysium に再生するのである。女王の永別の接吻をして悲しみのために死んだ Iras を見て、Cleopatra は、

The stroke of death is as a lover's pinch,  
 Which hurts, and is desir'd. (V. ii. 294~295)

と言う。死すら女王には官能的であり、恋愛である。

If she first meet the curled Antony,  
 He'll make demand of her, and spend that kiss  
 Which is my heaven to have. (V. ii. 300~302)

と言いながら Cleopatra は毒蛇に胸を咬ませる。

O, could thou speak,

That I might hear thee call great Caesar ass,  
 Unpoliced ! (V. ii. 305~307)

と如何にも勝誇つてうれしそうに毒蛇に言う。

Char. O eastern star !

Cleo. Peace, peace !

Dost thou not see my baby at my breast,

That sucks the nurse asleep ?

Char. O, break ! O, break !

Cleo. As sweet as balm, as soft as air, as gentle.

O Antony ! Nay, I will take thee too.

[Applying another asp to her arm.

What should I stay— [Dies.

Char. In this vile world ? So fare thee well.

Now boast thee, death, in thy possession lies

A lass unparallel'd. Downy windows, close,

And golden Phoebus, never be beheld

Of eyes again so royal ! Your crown's awry,

I'll mend it, and then play. (V. ii. 308~318)

この悲劇のこの場面は特にこの詩は英文学のみならず世界の何れの文学にもその比類を見ない人間業とは思われない最高のものであると評する学者もある。実にこの悲劇の場面は鬼神をも泣かしめるに足るものである。恋愛のために生き、そして恋愛のためによるこんで死んで行つた Cleopatra は単に一女性に過ぎなかつたのであるが、同時に比類なき高貴な女王と化したのである。この死は女王の後を追つて毒蛇に身を咬まして殉死して行つた侍女の Charmian の言葉によれば、

It is well done, and fitting for a princess

Descended of so many royal kings. (V. ii. 325~329)

であつた。Cleopatra は尊厳をもつて、この悪しき現世から夫 Antony の住む世界へと愛のよろこびを湛えて旅立つために死を受け容れたのである。其故にこそ安らかな美しい死顔をみて、Octavius Caesar も自らの敗北を認めて、

Bravest at the last,

She levell'd at our purposes, and being royal

Took her own way. (V. ii. 333~335)

と言い、また、

but she looks like sleep,

As she would catch another Antony

In her strong toil of grace. (V. ii. 344~346)

とその美しさを称え、Antony の傍に Cleopatra を敵かに手厚く葬つたのである。